太宰府の絵師調査事業広報誌

宰府画報

第 32 号
2026 年 10 月
（令和 8 年）

発　行
太宰府市教育委員会
文化財課

バックナンバーはこちらから

逸品探訪

吉嗣家資料

書画帖

吉嗣拝山 作



紙本墨画・墨書　折本装　縦 11.3cm　明治 8 年（1875 年）　吉嗣家資料

吉嗣拝山は明治 4 年（1871）、26 歳のときに事故で右腕を失い、翌年、切断した腕の骨を用いて「骨筆」を作りました。左手で筆を持つようになった拝山は、明治 6 年に東京を離れて大阪に住み、明治 11 年に清国へ渡りました。しかし、事故から渡航にいたる拝山の動向については、まとまった記録が少なく、その足跡は断片的にしかたどることができません。

本作は、まさにその頃の拝山を知るうえで貴重な資料です。縦約 11cm の小さな折本で、拝山による旅のスケッチや記録、漢詩などが記されています。写真で紹介しているのは、折本を少し広げて見たものです。

絵には、山々に囲まれた水面に一艘の舟が浮かんでいて、舟には幾人もの人物が乗り込んでいる様子が描かれています。これに続く墨書の冒頭には「乙亥九月出敦賀港渡船図」とあり、乙亥は明治 8 年（1875）にあたることから、この絵が同年 9 月、敦賀港を出る際の船の様子を描いたもの、末尾に大きな文字で「旅途」とあるので、拝山の旅行中のスケッチと記録であるとわかります。このあとには「金城」という記述が登場し、旅の目的地が金沢であったことも確認できます。当時、敦賀から金沢へ向かうには、まだ鉄道がなかったため、船と陸路を組み合わせる交通が一般的でした。

さらに見てゆくと、病床にあった旧友「久嶋君」を見舞ったとする絵があり、絵の上部には彼の病を慰めるために梅花を描き詩を詠んだと記されています。「久嶋君」が誰を指すのかはわかりませんが、大阪から金沢まで足を運んで見舞っていることは、両者に親しい関係があったと想像されます。

小さな画面にもかかわらず、絵にも文字にも筆勢があり、本作にはもうはっきりと、私たちが持つ拝山の詩書画のイメージが表れています。清国渡航以前の拝山の画技を、旅のエピソードとともに知ることのできる、とても興味深い逸品です。（井形栄子）



調査見聞

御前揮毫は檜舞台

～絵皿によみがえる牛の縁～

太宰府天満宮での御前揮毫

明治から昭和にかけて、太宰府には東宮時代の大正天皇や昭和天皇をはじめ多くの皇族方が訪れ、太宰府天満宮に参詣しています。そうした折には、太宰府ゆかりの絵師や書家が御前に召され、文書館で席上揮毫が行われました。中でも吉嗣拝山、萱島秀山、宮垣暢丸、藤瀬冠邨、吉嗣鼓山、萱島秀峰などがたびたび腕を振るっています。

左の写真は、大正9年（1920）4月6日、後の昭和天皇となる裕仁親王が、皇太子時代に太宰府天満宮に行啓された時の御前揮毫の記念写真で、前列の絵師たちは紋付袴の正装に身を包んでいます。天満宮の社務日誌によれば、到着した皇太子は参拝の後に北神苑を巡覧、クスノキを植樹して文書館に向かい、休憩をはさんで席画に隣席したようです。「萱島秀山、吉嗣鼓山、藤瀬冠邨の三画伯は御前揮毫の光栄に浴したり」という一文が残っています。



大正９年 (1920) ４月６日
皇太子裕仁親王行啓時の御前揮毫の記念に文書館入口前で撮られた写真
前列左から吉嗣鼓山、萱島秀山、藤瀬冠邨
個人蔵

御前揮毫の心構え

絵師たちにとって、御前揮毫は家の誉れでした。命を受けたその時から体調管理に努め、万一発熱などの場合は席を辞退、当日は朝から精進潔斎して衣服を整え、大事に臨みました。各家には親類縁者から祝いの酒や鯛が届き、宴席が張られたといいます。天満宮でも境内の安全管理はもとより、消毒や調度の整えなどが入念に行われました。ちなみに、写真前列左端の吉嗣鼓山の膝前に置かれた箱には、左手拝山として知られた父、吉嗣拝山の右腕の骨で作られた「骨筆」が入っています。鼓山は、ここぞ！という折に、父の遺品を携えて画席に臨んだようです。



《吉嗣拝山 骨筆》個人蔵
太宰府市教育委員会寄託
写真提供：太宰府市文化ふれあい館

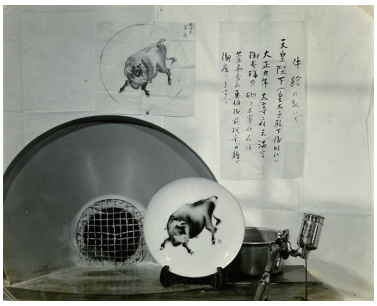
歳月を経て伝わる作品

御前揮毫は、15分程度の短い時間で作品を仕上げるため、絵師たちは準備に余念がありませんでした。実物は献上されて手元に残らないので、練習時の紙片や、後日同じ絵を記念に描いて残した余墨と呼ばれる作品が、旧家などに伝っていることがあります。しかし大正9年のこの時に、三画伯がどのような絵を描いたのかは明らかではありませんでした。

それから40年の歳月が流れ、昭和36年（1961）4月22日、昭和天皇・皇后は佐賀県へ行幸し、有田町の深川製磁を訪れます。右上の写真には、工房内で絵皿が制作される工程を、深川進社長が案内する様子が写っています。この時、絵皿の下絵に用いられたのは、大正9年、昭和天皇が皇太子時代に訪れた太宰府天満宮で、太宰府の絵師・萱島秀山が御前で揮毫した菅公ゆかりの「牛」の絵でした。菅原道真と昭和天皇は、共に丑年生まれ。説明を受けて、「（陛下は）しばらく目を閉じて当時を思い出しておられるご様子だった」と、翌日の毎日新聞は伝えています。

古い写真と絵師たちの作品。これらに各地の記録が加わることで、絵師たちを取り巻く世界もぐっと広がるように感じられます。（井上理香）





昭和 36 年（1961）4 月 22 日
（上）深川製磁社長の案内で絵付けを見学される昭和天皇
（下）壁に貼られた萱島秀山の牛図と、深川製磁製の牛の絵皿
壁の右側の紙には、「牛絵に就いて / 天皇陛下（皇太子殿下御時代）/ 大正九年太宰府天満宮ご参拝の砌り太宰府在住萱島秀山画伯御前揮毫の絵で御座います」と書かれている。写真は共に個人蔵

いちまい
画稿鑑賞

齋藤家資料

豊臣秀吉像

現在放送中のＮＨＫ大河ドラマ「豊臣兄弟」では豊臣秀吉・秀長兄弟が百姓から天下統一を目指す過程が描かれています。秀吉は天正10年（１５８２）の本能寺の変で倒れた織田信長の後継者として台頭し、同13年に関白に就任、同18年に後北条氏を滅亡させ全国統一を果たします。慶長3年（１５９８）秀吉が没すると豊臣家ゆかりの大名、社寺は秀吉の神格化のため、礼拝用に秀吉画像をさかんに制作しました。

齋藤家資料《人物肖像》には、束帯姿の秀吉像が複数描かれています。この秀吉像は画面右に「豊臣秀吉公像　山城國東山高臺寺蔵」と記されており、秀吉の妻・北政所が秀吉の菩提寺として慶長11年（１６０６）に創建した高台寺所蔵の肖像画の写しだと分かります。肖像画原本は慶長6年に狩野派の絵師が制作したと伝わるものです。



《人物肖像・豊臣秀吉像》　紙本墨画　巻子装　38.5 × 1723.8㎝

《人物肖像》には他にも歴史上の有名人物の肖像が描かれています。これは齋藤秋圃・梅圃が直接現地で見たものではなく、江戸時代に松平定信が制作した「集古十種」という古宝物図録を写したものだと考えられます。寺社の宝物は簡単に見ることができないため、各地のお抱え絵師はこのような絵手本を見て画の研鑽を積んでいたようです。

（木村純也）

メイショ
メイブツ

老松神社の注連柱

老松神社は、水城地区の産神として信仰され、菅原道真を祀る神社です。

境内の手水舎前には、人の背丈を超える注連柱が建っています。側面の「鼓山吉嗣慶謹書」から、吉嗣鼓山の書をもとに刻まれたことが分かり、石工の白水久兵衛、寄贈者の伊藤亀次郎・伊藤和一郎・花田市太郎の名も見えます。白水久兵衛は、国分天満宮の本殿や石碑にも名を残す石工です。

この注連柱建立の背景として、皇族の太宰府来訪が注目されます。老松神社の注連柱の裏面には「参宮記念」「大正九年十月十四日建之」とあります。鼓山は大正９年（１９２０）４月の皇太子（後の昭和天皇）来訪の際、太宰府神苑文書館において御召揮毫を行いました。正面に刻まれた「徳澤流千里」（右）、「恩光照萬家」（左）の語句（恵みが遠くの村里まで広がり、その光が家々を照らす意）にも、来訪の喜びを土地に刻もうとする人々の思いがうかがえます。

同じように、坂本八幡宮の注連柱（『宰府画報』第2号掲載）は大正12年3月の建立で、「参宮同行」と刻まれています。前年3月には貞明皇后が太宰府天満宮を訪れ、鼓山は皇后御前で揮毫を行っています。皇族の太宰府来訪を記念し、御前揮毫を行った鼓山に揮毫を依頼することで、来訪の記憶を今に伝えるものといえます。両者に鼓山が関わっていた点も興味深いところです。

水城の人々が鼓山に揮毫を頼んだ郷土愛が伝わってきます。（長野晃久）



老松神社の注連柱



注連柱裏面

関係者名鑑 Vol.11

内海吉堂（うつみきちどう）

生没年　嘉永3～大正12（1850～1923）
関係者　吉嗣拝山

プロフィール

明治～大正期の画家。越前敦賀（つるが）の人。名は復、字は休卿。四条派の画家塩川文麟（しおかわぶんりん）に学び、明治10年（1877）に清国に渡って画技を磨いた。帰国後は京都を拠点とし、日本南画協会を設立するなど中央画壇で活躍した。

吉堂は、祖父・父ともに画家で、吉嗣三代と同じく、地元敦賀では「内海三代」と称されています。吉堂は拝山より1年早い明治10年に清国へ渡り、東本願寺が海外布教のために設置した上海別院に寄宿しながら、現地の文人や、清国を訪れていた日本人画家、商人たちと活発に交流していました。明治11年の春に清国へ渡った拝山とも親しく交わり、拝山の清国渡航日記『日間些事記（にっかんさじき）』の5月の記事には、ふたりが上海から蘇州・杭州へ向かった旅の同行者であったことが記されます。

左上写真の《山水図》は、吉堂が拝山のために描いたもので、画中に「渓山秋霽」の題と、「戊寅端午後三日写於松江舟中（戊寅（つちのえとら）、端午（たんご）ののち三日、松江（しょうこう）の舟中において写す）」の墨書があります。松江は上海から蘇州方面に向かう水路の呉淞江（ごしょうこう）かと思われ、ふたりが確かに同じ舟で旅をしていたのだと実感されます。

左下写真の《松石図》は、時を経た明治19年（1886）の作品で、拝山が父・梅仙の為に催した古稀祝いに、吉堂から贈られたものです。大海を渡り、同じ船で見聞を広めたふたりの交流が、帰国ののちも続いていたことが確認できます。（井形栄子）

〔参考〕「没後一〇〇年記念　内海吉堂」（敦賀市立博物館、2023年）／「吉嗣家資料『日間些事記』解題（長尾直茂）・翻刻」（太宰府市公文書館紀要『年報』太宰府学第18号、2024年）





（上）内海吉堂《山水図》絹本墨画淡彩・明治11年／（右）内海吉堂《松石図》絖本墨画・明治19年／いずれも吉嗣家資料

ひとことくずし字

【閒是寶】

今回は忙しい日々を過ごす現代人に染みる言葉を紹介します。「閒是寶（かんこれたから）」と読み、「ゆとりのある時間こそ何よりの宝である」という意味になります。



篆書（てんしょ）体で刻まれた3文字はいずれも原形を留めていますが、細かく見ると現在の書体とは異なります。「閒」は「間」に見えますが、「日」の上線と下線が左にはみ出しています。「是」は下部の「正」の線がカギ型に折れ曲がっています。「寶」は「宀」が文字を覆うように囲っています。

この言葉は中国の元代末から明代の詩人・張羽（ちょう）の詩の一節から採られたものです。張羽の漢詩集『静居集』に収められた「山中答高彦敬」という詩の中に「浮生閒是寶、何必望爲官（浮生、閒は是れ宝。何ぞ必ずしも官となるを望まん。）」とあります。はかない人生では心静かに暮らすことこそ宝だ。どうしてわざわざ役人になることを望むのか。という意味で、自分の時間を生きることの大切さを説いています。

張羽は当時を代表する文人でしたが、明の皇帝・朱元璋（しゅげんしょう）に仕え、最後は罪に問われ亡くなったと伝えられます。官職にとらわれず、静かな環境で書に向き合うことこそ大事なことだったのかもしれません

（木村純也）

この資料



印面　2・4×1・3cm
総高　2・3cm
材質　水牛角
吉嗣家資料

編集後記

今年もあっという間に過ぎて残すところ約2ヶ月。暇を求めながらも忙しく駆け抜ける日々が続きます。（木）

やっと涼しくなりました。旅したい気分は山々ですが、吉嗣家資料【画稿編】報告書編集は山また山。〝熱い〟盛りです。（井）